

島原大変古文書より

林 寅 喜

(会員・佐伯市中の島町)

はじめに

平成二年十一月十七日百九十八年振りに噴煙を上げた雲仙普賢嶽は、一年五ヶ月経った今も活発な噴火活動を続けており、これにより避難生活を余儀なくされている多くの方々に対し、慎んでお見舞いを申し上げます。

さて、私は昨年十一月学研から発行された驚異の科挙シリーズ巻八の、「今火山が危ない」という本を求めて読んでいくうち、寛政四年の島原大変古文書が眼に止まった。

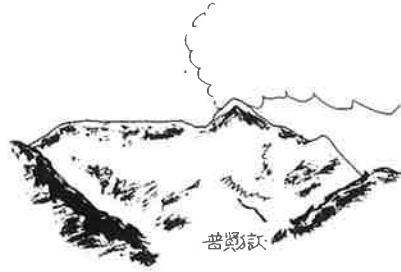
たまたまその時、市立図書館開講の日曜文化講座に席を置いて古文書の勉強をしていたので、早速拡大して解読を試みたが、残念ながら文面の一部(二ページ分)しか載っていないために、全体の様子を知ることが出来ず何とかして全文の入手は出来ないものかと思案していた

矢先、幸いにも私が所属するシルバー人材センターの会員研修旅行で島原へ行くことが決定した。これは願ってもない機会と考え、取敢えず同市の市立図書館に電話を入れてみたら、コピーの許可はしていないが、写真撮影は差し支えないと言う返事を貰った。そこで、研修翌日の十一月二十七日朝、一行と別れて図書館へ行き、左の三編をフィルムに納めて持ち帰った。

- 一 島原大変様子書 全文十六ページ
- 二 普賢嶽吹出しの事 一部十九ページ
- 三 肥前温泉災記 一部挿絵共二十ページ
- 四 右の解読文(コピー) 略全文

帰宅後、早速現像焼付けをして一先ず倍に拡大し、更に倍の四倍に拡大したらA4R版の大きさまでになったが、反面文字がにじんで読みづらくなった。そこで、止むなく写真の上でレンズを当てがいながら解読し、その都度倍に拡大したコピーを鉛筆などでって修正、出来上がったものを倍に拡大して製本した。

しかし、勉強不足の所為か所々虫が喰ったように不明な部分があったり、原本そのものが消えて解読出来ない



お読み頂いて当時の人達が
どんな思いで災難に接したか
また、噴火の進み具合や状況
などお分かり頂ければ幸いです
ある。

箇所もある。けれども、凡そ
全体の様子は知ることが出来
た。そこで、この三編に基づ
いて順を追いながら私なりに
綴ってみた。



肥前の国島原領七万石（三河深津松平氏）の御城下よ
り西に五里（二十キロ）を隔てて温泉山がある。かつて
は耶蘇宗門の聖地として栄えたこともあったが、今は真
言宗総本山仁和寺の末寺で一乗院という寺があり、付近
には農家や茶店などもあって、四面大明神を安置し丈六
の釈迦尼仏が祭られている。

また、熱湯を吹き出す地獄もありその有様は物凄く、この世のものとも思えぬ様な恐ろしき眺めではあるが、幾つかの温泉場もあって、近郷近在からの湯治客も多く、疲れを癒してくれる楽しい所でもある。

そこから一里余り、険しい山道を登り詰めた所が普賢獄で、眼下に七面大明神を祭る社が見える。その辺りを前山といつて十八丁（約二キロ）の登りである。



この前山から普賢獄にかけてを奥山と呼び、七つの谷七つの峯々が続き、小鳥の囀りや清水の音、猿の飛び交う姿など見ることの出来る深い山々である。ところが、寛政二年（一七九一）十月中旬頃より山鳴りを伴う地震が頻発して、その都度雷のような大音響が続くため、村人達は大いに驚き不審を抱いて、誰彼となく山中に分け入ってみた。しかし、別にいつもと何等変わった様子もなく、唯山中が揺れ動くだけにあきれ果てて、その儘立ち帰る人もあるかと思えば、心なき人々は見物に行くと呼び寄せて普賢獄に登り、山鳴りを楽しみながら終日酒に酔いしれ、帰りには浮かれて唄の手拍子で戻ってくる者まで出てくる始末であった。

この有様を見て心ある人々は驚き、行く末どんな事態に発展して行くのかと案じていた。

しかし、山鳴り振動は一向に止むことなく続き、翌寛政四年正月十七日の夜明け頃から引き続いて三度の大地震があり、翌十八日夜半から再び激しく揺れ続いて、子の刻（真夜中）になって遂に噴火した。その音は島原半島全域に響き渡った。翌朝人々は夜の明けるのも待ち兼ねて起き出し、雲の晴れ間を見て普賢獄を望むと、噴煙



は渦巻いて中天にまで達し、昇り来る朝日に映えて光り輝き、赤く染まって錦の如くに見え、到底人の近づける状況ではないと思つた。

しかし、調べの役となつた人達が近くまで攀じ登つて見た様子では、普賢小祠前の広場から石段を六十間（約一〇九メートル）程下がつた所より東南へ続く広場があつて、その付近一帯が指し渡し三十間（約五五メートル）程窪み、その窪みの中にまた指し渡し三、四間（五、五、七、三メートル）程の穴があき、地中より土石を盛んに噴き上げ、その穴へ上の石段が崩れ込んでいたと言ふ土石は暁方には山下の村々へ向かつて二丁半（約二七三メートル）ばかり流れ落ち、噴煙のため近郷近在の草木はいうに及ばず、田畑や野菜などまで悉く灰を冠つて真白くなつた。

この噴火は二十日頃まで続き、その後日が経つにしたがい和らいだかに見えたが、地震の方は止むことなく続いた。恐れをなした人々は行く末を案じて今はもう仕事も休み、只命を守ることにのみ専念する有様であつた。

やがて閏二月の初め頃になつて漸く静かになり、湯気の噴き出し口は泥沼のようになって、人が五、六人は上

がれる程にまで鎮まった。

丁度その頃、城下に不思議な妖怪が現われた。それは夜半人々が寝静まった頃、地上から五丈(一五メートル)ばかりの所を大船が走って行く音が響き渡り、この音に驚いた人達が外に駆け出して見ると、帆かけ船が二艘梶を揃えて走って行くのが見える。船の中から人声がして「危うし危うし」と叫びながら闇に消えて行方知れずとなった。見ていた人達は不思議なこともあるものだ。近頃は山鳴り震動に加えて大地を揺がすような大地震まで続き、只事では済むまいと話し合っていた矢先、またも一夜程経った夜半頃に今度は白狐が現われて、「用心すべし大流山」と三度叫んで飛び去った。やはりこれは神のお告げだと言う人もあつたが、大方の人達は信じようともせず油断していた。

森獄城(鳥原城)から約二里(八キロ)の所、普賢獄の続きに三會村という小さな村がある。この村に穴廻迫という大きな谷があり、その谷が二月四日よりの地震続きで崩れ込み六日巳の刻(午前十時)頃より頻りに噴煙を上げて音は天地に響き渡り、落石は雨霰の如くで火口は広がるばかりとなった。そこは普賢獄の東に約一里(四

キロ)を隔てており、道が険しく容易に近づくことが出来ないため、遠くから眺めるより方法はなかった。それも噴気のために詳しくは分からなかったが、崩れ込んだ広さは凡そ三町歩(三ヘクタール)位と思われた。中旬頃からは焼石(溶岩)が盛んに流れ出るようになり藩からの知らせによると、その早さは初めの頃には幅約百五十間(二七二メートル)で、一昼夜に二十間(三六メートル)程宛焼下がっていたのが、五、六日もすると五間(九メートル)或いは十間(一八メートル)と落ちて来たたということであつた。

一方、月も半ば過ぎからこの様子を一目見ようと領内はいうに及ばず、近国よりも老若男女の別なく大勢の見物人が押しかけ、ここ千本木界限は城下町に劣らぬ賑わいとなつた。

迎える女達は紅白粉の色を競い、三絃の音色に連れられて唄う花唄は遠く呂木山までも訝して、茶店や酒屋も店を出し、足弱な人も出無精な者も一度もここに来ぬ者とてなかつた。

また、町家の隠居は駕籠で乗り付け、酒汲みかわして花開く如くに浮かれていたが、その山がこの先恐ろしい

地獄の山に変わろうとは露知らず、昼夜の分かちなく集まる群衆に藩では見物停止の布令を出した。しかし、家主一人は事情を知るためとして差し許された。一方、火気は一向に納まる気配がなく、地中より鉄のような焼岩が次々と生まれ、高く抜き出しては崩れ落ち、その度毎に煙が立ち込め、砕けた岩は堅炭のようであった。

藩は温泉山一乗院へ鎮静の御祈祷筆行を命じ、穴廻迫近くに飯屋をかけて閏二月十四日から七日七夜の間、温泉山の僧侶十余人に小浜村覚王院の山伏を加えて鎮火の祈りを捧げた。祈祷はこの外諸社寺にも申し付けられたその甲斐あってか中頃より少し宛静まり、穏やかになつたかに見えたため、人々は御祈祷の法力によるものと思つて喜び合つた。しかし、噴煙は止まることなく、焼石の流れも最早千本木在の百姓家まであと六、七十間（一〇九〜一二七メートル）と迫つて来たが、やがてその長さ凡そ二里十八丁（地図をスケールアップして見ると二十八丁（約三キロ）の間違いではないかと思ふ）で止まつたが、百姓家六軒が焼け落ちた。この頃になると地震も日に二、三度位と大分静かになつた。

藩は万一に備えて、郡中から大小三百艘の船を集めて

これに備えたが、状況に変化が見られなかつたため、二月二十四日帰郷を命じたけれども、これには賛否両論があつたようである。

普賢嶽より十五、六丁（一、六七キロ）隔てた表側に蜂窪という山がある。この山が二月二十九日から頻りに鳴動して未の下刻（午後三時頃）より煙を噴き出し、閏二月三日にはそこより二丁（二二〇メートル）程隔てて西の方にある飯洞岩という所からも噴煙が上がつた。しかし、両所共殊更に唸しくて寄り付き難く、詳しい様子が分かり兼ねるため、人々は先を競つて見物に出かけたが、藩は早速立ち入り禁止の高札を立てた。やがて閏二月下旬頃には夜に入ると火気焰々として鳴動する様子が見え、加えて毒性の湯煙りを噴き上げるため、隠れて見物に行った人や樵などが呼吸困難となつて気分が悪くなつたり、時には猪や狐兔の類、また小鳥などが多く死んでいたといひ、高札もこの辺りのことを考えて立てられたものと分かつた。

この閏二月中には小役人何某の家が壊れたとか。家々の瀬戸物が破損したとか。城下近辺の百姓家は大部分が石垣に囲まれた作りのため、地震の度毎に崩れた石垣の

下敷きになったとかいう話ばかりであった。

閏二月も終わって三月朔日申の刻(午後三時〜五時)

頃から再び地震が続き、夜中に六度程大揺れに揺れ、九ツ(真夜中)頃から暁方まで揺れ続いた。それが連日のように続き、四日から五日にかけては一日に五十回から七十回位で、あとはもう回数も分からない程であった。



また、今度は普賢獄の頂上が噴き割れて炎を噴き上げ噴石は大雨の如く落下して真っ黒い噴煙を上げ、地震の度毎に前山の一部が崩れ落ちるといふ事態に、城下の人達も百姓家も驚いて遠くへ立ち退いた。藩主(この時は八代忠馮公)も家族と共に山田村へ避難した。その後、日に二十回から三十回位と小止みになったので二十七日御帰還、翌二十八日頃までには領民達も殆ど家に戻った。

ところが、四月朔日暮六ツ半(午後七時)頃からまたもや二度にわたって天地も裂けんばかりの大地震が続き二度目のあとには大津波が押し寄せ、一瞬の間に城下や村々を呑み込んで引き去ったと思いきや、前山の南西約四分の一程が熱水と共に山津波を起こして大崩落、権現山をはじめ海沿いの小山は悉く崩れ去るといふ、島原は瞬時にして地獄の海となった。人々は壊れた家に潰されて死するもあれば、波にさらわれて流れ行くもあり、助けを求め断末魔の叫びや、念仏を唱える人声などが千々に乱れて、此の世も末かと思えばかりの悲惨な姿となった。

津波の引いた後は壊れた家や土石と流木で埋め尽くされ、至る所に人や家畜の死骸が横たわり、半死半生で助

けを求める者も少なくなかった。幸いにして助けられた者は一分にも満たなかったという。町の様子は一変してしまい、海沿いには至る所に小さな鳥が出来て、入江は一面の石原続きとなり、前山の麓にあった安徳村は八分方が埋まってしまふという大惨事となった。津波は御城より三丁（三三〇メートル）も上まで打ち寄せたが、不思議なことに城内は何の異変もなかったといい、代わって大手門前では大勢の人が死んでいた。

藩は九死に一生を得た命ある者や怪我をした者など、応急の手当てを施して縁類や北目筋の村々に預け、浄願寺という寺の流れた跡へ生き残った村人足を集めて、大きな穴を掘らせ、入牢中の罪人四十人許りを引き出して、罪一等を減じて放免を約束し、死骸の運び入れを行なわせたが、日毎に海より打ち揚げられる死骸に手も廻り兼ねたといい、事変後の御改めによれば、その穴だけで千六百人余が埋められたという。

この島原大變惨事の被害は次のようである。

津波で流死した者（城下だけと思われる） 一万二、

三千人

肥後天草まで含めた死者 凡そ三万人

流された家 三千から三千二百軒（城下だけと思われる）

城下だけの寺社流失 寺九ヶ寺 社四社

船の流失 藩の船大小三十艘 廻船や漁船二百二

十艘

流失した米 四千五、六百俵

流失した御番所 三會村・堂崎村・源江村 以上

三ヶ所

被災後、藩は各地に炊き出し所を設けて領民の救済に当たり、一度に千七百人分の焚き出しをしたという。